

李白「早發白帝城」の發想

一、はじめに

白帝城は三峡の瞿塘峡の西、今の四川省奉節縣にあり、李白の當時は高い山の上にあった。『荊州圖記』にいう。

「白帝城、西臨大江。東南高二百丈、西北高一千丈（白帝城、西のかた大江に臨む。東南は高さ二百丈、西北は高さ一千丈。」（『太平御覽』卷一百九十二）

江陵は荊州ともいい、現在の湖北省江陵縣であるが、當時は長江に臨んだ交通の要所であった。「早發白帝城」は、白帝から江陵までの航程を詠じる詩である。

早發白帝城 李白

朝辭白帝彩雲間 朝に辭す 白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵 一日にして還る

兩岸猿聲啼不盡 兩岸の猿聲 啼きて盡きざるに

輕舟已過萬重山 輕舟 已に過ぐ 萬重の山^②

あさ、朝焼けに包まれた白帝城を出發して、千里のかなたの江陵まで、一日で歸つてきた。その途中、兩岸からは猿の鳴き聲が

市川桃子

いつまでも聞こえていたが、軽々とゆく舟は、たたなわる山並みをもう通り過ぎていた。

三峡の千里、五百キロメートルを、一氣に一日で走り下る。その間、兩側からは、三峡に棲む猿の高く長く引く聲が聞こえてくる。多くの重なる山々が兩側から迫る中を、軽く飛ぶような船が走る。素晴らしきスピード感である。李白の名作の一つとされる。^③

この作品については、制作時期に關して議論がある。その議論は、松浦友久編『唐詩解釋辭典』^④に整理してあるので、それを借りてここに載せる。制作時期については、次のように五つの説がある。

A 早年、作者がはじめて蜀を出て三峡を下った時の作品。

B 晩年、永王の亂に加擔したことから、罪を得て夜郎に流される途中、赦免に遇つて三峡から江陵に歸る時の作品。

C 安陸時代（二十七歳ころより約十年の間）三峡で遊覽して歸る時の作品。

D 開元年間、二度目に蜀を出て、安陸の家に歸る時の作品。

E AとB、いずれの時期とも特定できない。

AとBが主な説である。A説では、ふるさとを初めて離れるときの

郷愁が感じられるという。^⑤ B説では、主に「還」字に着目して論を立てる。^⑥ C説は、李白が故郷を出て以降、再び三峽に行つて遊んだことがあるとする。^⑦ D説は、李白が蜀の故郷を出てからまた故郷に戻ったことがあるとする。^⑧ E説は、「還」の一字では、A B説のどちらかに決まらないとする。^⑨

ところで、上記の説はいずれも、李白が實體験に基づいてこの作品を作った、ということが暗黙の前提となつていいる。

A説は、初めて三峽を通つたときの驚きと郷愁によつて、B説は、恩赦にあつた喜びによつて、C・D説は、幾度か三峽を通つたときの實感によつてこの作品が作られた、と考えている。

議論は、船旅の途中で作つたか、船旅を終えてから作つたか、という問題にまで及んでいる。

本論では、この前提を再考する所から検討を始めた。

二、『水經注』による考察

清・王琦注『李太白全集』の本詩の注に、北魏・酈道元『水經注』卷三十四「江水」の白帝付近についての記事が引かれている。^⑩『水經注』は紀元五く六世紀に作られた河川についての地誌で、様々な川について、周辺の風景や町の名前、流れていく方向や距離などが書かれている。この記事は多くの近人の注釋に引用されている。^⑪

「自三峽七百里中、兩岸連山、略無闕處。重巖疊嶂、隱天蔽日、自非停午夜分、不見曦月。至于夏水襄陵、沿沂阻絕。或王命急宣、有時朝發白帝、暮到江陵。其間千二百里、雖乘奔御風、不以疾也。春冬之時、則素湍綠潭、迴清倒影、絕巘多生怪柏、懸泉瀑布、飛漱其間。清榮峻茂、良多趣味。每至晴初霜旦、林寒澗肅、常有高

猿長嘯、屬引淒異、空谷傳響、哀轉久絕。故漁者歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳。」

李白「早發白帝城」と『水經注』の記事とを比較してみよう。まず、李白「早發白帝城」題名及び第一句と第二句である。

『水經注』「或王命急宣、有時、朝發白帝、暮到江陵、其間千二百里、雖乘奔御風、不以疾也（或いは王命急に宣ぶれば、時有りて、朝に白帝を發し、暮には江陵に到る、其の間千二百里、奔に乘り風を御すと雖も、以つて疾しとせざるなり）。」（王の命令がただちに下りたときには、時には、朝、白帝を出發すると、暮には江陵に着く。その間、千二百里。たとえ奔馬に乘り風を御すとしても、この舟より速いとはしない。）（傍線筆者。以下同じ。）

李白詩の題名「早發白帝城」及び第一句冒頭「朝辭白帝」は、『水經注』にある「朝發白帝」とほぼ同じである。

李白第二句「千里江陵一日還」について。『水經注』では「千二百里」で、李白の詩では短く「千里」としているが、これは詩のリズムからの變更と考えられよう。李白の詩では「一日」とあるが、夜に航行するのは危険なので、一日といっても朝から翌日の朝という意味ではなく、「朝から暮まで」の半日、すなわち、『水經注』と同じ意味だと考えられよう。

李白の第一句「朝辭白帝彩雲間」の「彩雲」という言葉は『水經注』にはないが、他は、兩者ほぼ同じことを言っているといえる。李白の「千里を一日で還る」という句は、李白の大げさな表現ではなく、『水經注』に記録として残っていることであつた。

次に、『水經注』と李白の第三句について比較する。

『水經注』「常有高猿長嘯、屬引淒異、空谷傳響、哀轉久絕（常に

高猿の長嘯する有り、屬引凄異にして、空谷に傳わり響き、哀轉し久しくして絶ゆ。」(いつも猿がいて口笛を吹くように長く鳴き、その鳴き聲は長く續いて常ならず凄惨で、深い谷に傳わって響き、哀しげな鳴き聲が何度もこだまして、いつまでも響いてから、消えていく。)

李白の第三句「兩岸猿聲啼不盡」は、やはり、『水經注』の記事を要約して述べたもののように見える。『水經注』を参考にして解釋すれば、李白の句で「猿聲啼きて盡さず」というのは、屬引、すなわち猿の聲自體が長く尾を引く、ということだけでなく、さらにそれが谷に何度もこだますること、いつまでもその聲が消えない、ということになる。

次に、『水經注』と李白第四句について比較する。

『水經注』「自三峡、七百里中、兩岸連山、略無闕處。重巖疊嶂、隱天蔽日(三峡自り、七百里中、兩岸の連山、略ぼ闕くる處無し。重巖疊嶂、天を隠し日を蔽う。)(三峡からの七百里の中、兩岸の連山は、ほぼ山が途絶えるところが無い。重なる巖、たたなわる峰が、天を隠し太陽を蔽う。)

李白第四句「輕舟已過萬重山」にある「萬重の山」とは、兩岸七百里も續く連山、『水經注』にいう「重巖疊嶂」のことで、李白のこの句は、その七百里を抜けて平野に出たことをいうのである。

このように、李白「早發白帝城」の詩と、魏・酈道元『水經注』の記事とを照合すると、第一に、共通の語が多く、第二に、出發、航程、猿、連山と、共通の場面が用いられており、第三に、『水經注』によって李白の詩がよりよく理解できることがわかる。

すなわち、李白のこの詩は、『水經注』の記事を下敷きにして作られているのであって、李白が『水經注』の記事を見たこともなく、本

詩が『水經注』の記事とは全く關係なく、實感のみで作られた、とは考えにくいのである。

三、體驗についての考察

では次に、李白が白帝から江陵まで一日で下った體驗があつたか、について考察してみたい。

『水經注』によれば、千二百里、六百キロを、一日で船が走ることがあつたという。しかし、『水經注』の記事によれば、いつでも、どの船でも六百キロを一日で走り抜けたわけではない。「王命急宣」とあるから、王の命令で特別に速く船を走らせた時のことである。

「王命急宣」については、西晉・木華「海賦」(『文選』卷十二)に次のようにある。

「若乃偏荒速告、王命急宣、飛駿鼓楫、汎海凌山(若し乃ち偏荒速やかに告げ、王命急に宣れば、駿を飛ばし楫を鼓し、海に汎び山を凌ぐ。)(邊境の地から急報があり、王の命令がただちに下れば、馬を飛ばし、かいを叩くように漕いで、海をわたり山を越える。)

都から遠い僻地で急變が起つた時には、速やかに報告するようにとの王命が下り、海をこえ山をこえて、馬を飛ばし、櫂を漕ぐのである。そのような船は、急事を命がけで傳えるようなときに出るのであって、平時に出るわけではない。

それも、いつも一日で白帝から江陵に行けたわけではなく、『水經注』に「有時(時には)」とあるから、條件がそろつたときには一日で白帝から江陵まで船が走つた、ということである。水量が多い季節、晴れていて、追い風が吹き、隠れた岩を避ける腕の良い船員がいて、命知らずの屈強な漕ぎ手がそろっているような場合に、命がけで行け

と命じられれば一日で行くことができたのかもしれない。

李白が、蜀から出てくるときでも、三峽に遊びに行つて江陵に戻る
ことがあつたとしても、蜀の故郷に戻つてから江陵に歸つてくること
があつたとしても、または赦免によつて戻るときでも、「王命」もな
いのにそのような快速船に乗り、たまたま『水經注』と同じように白
帝城から江陵まで行つた、というようなことが考えられるだろうか。
常識的に考えて、あり得ないように思われる。

また傍證として、同時代の杜甫「最能行」に次の句がある。

峽中丈夫絶輕死 峽中の丈夫 絶だ死を輕んじ

少在公門多在水 少なく公門に在り 多く水に在る (略)

欹帆側柂入波濤 帆を欹て柂を側けて波濤に入り

撇旋梢瀆無險阻 旋を撇ち瀆に梢して險阻無し

朝發白帝暮江陵 朝に白帝を發し暮には江陵

頃來目擊信有徵 頃來目擊するに信に徵有り

杜甫のこれらの句から、次のようなことがわかる。

杜甫も、「朝發白帝、暮到江陵」という記事を、『水經注』か、ある
いは他の本で知つていた。しかし、杜甫も、「朝發白帝、暮到江陵」
という體驗をしたことはなかった。なぜなら「頃來目擊信有徵」と言
つてゐるからである。つまり杜甫は、「命知らずの水夫の様子」を
「徵」として「朝發白帝暮江陵」の句が本當だろうと推測したことにな
る。實際に一日で到着した、という體驗を述べる句ではない。

以上から、つぎの三點が言える。李白も杜甫も、第一に、「朝發白
帝、暮到江陵」という句を知つていた。第二に、自分では「朝發白帝、
暮到江陵」という體驗をした可能性は低い。しかし、第三として、典
故があることだし、「時には白帝から江陵まで一日で行くことがある

だろう」と考えていた。

四、傳記からの考察

「早發白帝城」の制作時期についての、もつとも有力と考えられて
いる説はB説であるが、それについて、實際に白帝から江陵まで下つ
た體驗はあつたのか、ということについて考えてみよう。

李白が恩赦の令を受けたのは、次の作品によつて、「巫山陽」であ
るとわかる。

自漢陽病酒歸寄王明府 (漢陽自り酒に病みて歸り王明府に寄す)

(冒頭四句) 李白

去歲左遷夜郎道 去歲 左遷す 夜郎の道

琉璃硯水長枯槁 琉璃の硯水 長く枯槁す

今年勅放巫山陽 今年 勅放す 巫山の陽

蛟龍筆翰生輝光 蛟龍筆翰 輝光を生ず

恩赦の令を船の航行中に受けたとは考えにくい。受け取つたのは
「巫山陽」、すなわち巫山の南にある役所であつたと考えられる。

現代の地圖を参照すると、白帝城は巫山から三十數キロ上流である。
巫山から白帝までは、相當の距離を遡らなければならない。

李白は「上三峽」という詩を作り、「三朝上黄牛、三暮行太遲 (三
朝黄牛を上り、三暮行くこと太だ遅し)」と歌つてゐる。黄牛は三峽にあ
る山の名。三峽を上るとき、三日間をかけて、ようやく黄牛山を通り
過ぎたという。エンジンも蒸氣機關もなかった時代には、三峽のよう
な急流を遡ることはたいへんな努力を要した。岸から人が引つ張つて
上げたという。そのような思いで三峽を遡るのである。それなのに、
巫山の南で恩赦にあい、さらに何十キロも遡つてわざわざ白帝まで行

つてから東に還る、ということは考えられるだろうか。恩赦にあったのだから、一日も早く下つて歸りたいと思うのではないだろうか。

左遷後に限らず、李白の生涯を通じて李白が白帝に滞在したことを示す明確な詩文は残っていない。巫山にいたということは、李白「古風五十九首」の五十八（我行巫山渚^①）などの詩に見られる。

恩赦を受けて後、漢陽、江夏、巴陵、洞庭湖にいたことは、それぞれ、次の作品から知られる。「自漢陽病酒歸寄王明府」、「江夏寄漢陽輔錄事^②」、「巴陵贈賈舍人^③」、「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭^④」。しかし、このころ、江陵（荊州）に滞在したことを示す詩文は、管見するところ、見当たらない。まして、恩赦を受けてようやく三峽を脱して江陵に戻り着いた、ということを書ける作品は見られない。

これまで制作時期に關してB説について述べてきたが、上記のことは、はじめて蜀から出てきたというA説についても、物見遊山であったCD説についても言えることである。蜀から下つた若い頃に、あるいは三峽に遊んだときに、王命による命をかけた快速船に乗って白帝から江陵まで三峽を下つたとは考えにくいし、また、本詩をのぞけば、そのことを示す詩文もない。

もちろん、どのような可能性も、無いことを證明することは困難である。本章では、傳記や詩文から見た時、A説からC説までを論證することは難しい、ということを書けた。

さてこれまで、李白「早發白帝城」は、白帝から江陵までの實體験を述べた可能性は小さい、ということを書けてきた。そうすると、この作品は、三峽下りの船の中でも、いつでもどこでも、作られた可能性があるのかもしれない。

制作の時期について、別の角度から考察を加えたい。

五、發想の時期——語彙による考察

上記で述べたように、李白が白帝に滞在したことを示す詩文は見當たらないが、「白帝」という言葉を詠み込んだ作品はいくつか見られる^⑤。

その中で注目されるのは、作品の制作時期がわかる「爲宋中丞請都金陵表」^⑥「竄夜郎於烏江留別宗十六璟」^⑦「留別龔處士」^⑧三作品である。これらの中でも、まず「爲宋中丞請都金陵表」に注目したい。

至德二載、李白は永王璘の軍隊に参加したために尋陽の獄に入れられ、御史中丞宋若思と宣慰大使崔涣の取り調べによつて釋放され、出獄して宋若思の幕府に加えられた。この上表文は、李白が宋若思に代わつて起草したもので、肅宗に對する金陵遷都の建議が主な内容となつている。代筆ではあるけれど、この上表文の中で「河北では二つの都は破壊され、民衆が疲弊している。しかし江南は侵攻を受けていず、豊かで軍勢力もある。金陵を都とすれば、安史の亂を平定できる」という主張は、李白自身の意見を反映している。この上表文の最後の方に、「朝發白帝、暮宿江陵」の句がある。

「飛章問安、往復巴峽、朝發白帝、暮宿江陵。首尾相應、率然之舉。（飛章安を問ひ、巴峽を往復するに、朝には白帝を發し、暮には江陵に宿す。首尾相應じ、率然の舉なり。）」（急ぎの手紙で安否をお尋ねになるとしても、巴峽を往復するのは速く、朝に白帝を出發すれば暮れには江陵に泊ることができるほどで、蜀と金陵の間が相應じるのは、まるで率然という常山の蛇が、首と尾を一貫させて攻撃するようなものです。）

ここで、南京（金陵）を首都とする利點の一つとして、「朝發白帝、

暮宿江陵」という『水經注』の句が引用されている。もし南京が首都となつて肅宗が南京にいれば、蜀に滞在する上皇（玄宗）との連絡が容易に取れるであろう、と主張しているのである。

永王璘の軍隊に参加していた時代に書かれた、李白「永王東巡歌十一首」の四に次のようにある。

「龍盤虎踞帝王州、帝子金陵訪古丘。春風試暖昭陽殿、明月還過鵲鵲樓（龍盤虎踞帝王の州、帝子金陵に古丘を訪う。春風試みに暖かなり昭陽殿、明月還た過ぐ鵲鵲樓）。」

この詩について、郭沫若は、李白がもともと南京遷都の主張を持っていたので、この詩に南京の復活を描いている、とする。郭沫若のいうように、南京を首都とする、という構想は、李白が永王の船團に参加していたころから持っていたものであろう。そして、その理由の一つとして、上皇のいる蜀との連絡が容易であるという説の根據となる、『水經注』の「朝發白帝、暮宿江陵」というくだりが、この時期に、強く意識されていたのである。

「爲宋中丞請都金陵表」が書かれた後、豫想よりも重い刑が確定して、李白は夜郎に流罪となる。

次に、刑が確定した後、夜郎に向かおうとするときに作られた、「竄夜郎於烏江留別宗十六環」「留別龔處士」の詩句について見てみたい。

「白帝曉猿斷、黃牛過客遲（白帝に曉猿斷え、黃牛に過客遲からん）」（これから長江をさかのぼれば、白帝山では曉の猿が鳴き絶え、黃牛山では舟行が遅いことだろう。）（竄夜郎於烏江留別宗十六環）

「我去黃牛峽、遙愁白帝猿（我は黃牛峽に去り、遙かに愁う白帝の猿）」（私はこれから黃牛峽に行き、ここから遙かかなたで、白帝山の猿

の鳴き聲を悲しく聞くことだろう。）（「留別龔處士」）

いずれも、白帝と黃牛が對語となつて出てくる。これらの詩は、これから三峽に向かおうとする前に作られた詩である。だから、下りの體験を述べているのではない。白帝も黃牛も、色彩の面から對語としてふさわしいが、それだけではなく、ふさわしい典故があるから書き込まれているのである。典故というのは、『水經注』卷三十四の、白帝に關する記事と、次章に述べる、やはり卷三十四にある黃牛に關する記事のことである。

「竄夜郎於烏江留別宗十六環」「留別龔處士」「爲宋中丞請都金陵表」の三作品から、李白は、永王璘の軍團に参加しているときから、流罪になつて三峽をさかのぼるまで、『水經注』の「朝發白帝、暮宿江陵」という記事を強く意識の中に持っていた、ということがわかる。

このことから、李白の「早發白帝城」も、このころ、すなわち永王璘の事件に關連する時期に作られたのではないかと推測される。では制作時期については、やはり「はじめに」で記した「B 晩年、永王の亂に加擔したことから、罪を得て夜郎に流される途中、赦免に遇つて三峽から江陵に歸る時」なのではないか、という意見もあろう。しかし、これまでの考察からは、そのように斷定することはできない。

永王璘の船團に参加しているときに書かれた可能性も十分にある。これまでの考察から推測できるのは、『水經注』の「朝發白帝、暮宿江陵」という句を強く意識していた、永王璘の事件に關連する時期に作られたのではないか、ということである。

次に、制作時期の議論から離れて、本詩が書かれたときに李白が據つて立つた考え方について述べたい。

六、典故の考え方

これまで、李白が實際に白帝から江陵までを一氣に下ったことは無かつただろうということを述べてきた。では、なぜこの作品に「早發白帝城」という題名が付けられ、「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還」という句があるのか。

それは、李白が嚴密に典故に據ろうとするからである。李白は、獨創性よりも、典故を重んじる。このことについて、次の二點をいうことが出来る。

第一に、李白には、先人や知人の詩句をそのまま用いることに躊躇はない。

李白の七言詩「山中與幽人對酌」の第三句「我醉欲眠卿且去（我は酔うた眠らんと欲す卿且く去れ）」は、『宋書』卷九十三「隱逸」「陶潛」の「潛若先醉、便語客、我醉欲眠卿可去（潛若し先に酔えば、便ち客に語る、我は酔うた眠らんと欲す卿去る可し、と）」の陶潛の語をほぼそのまま用いている。アイディアだけを取って語句を変えて自分のオリジナルの句にしよう、ということとはしない。なぜなら、典故を重んじるとし、典故による廣がりを期待するからである。このような例は他にも幾つも見られる。

第二に、李白は典故に忠實である。たとえば、典故のない數字はほとんど使わない。⁽²⁸⁾三峽の千里を一日で下るといふ、驚くような數字にも典故があつたのである。

たとえば、『水經注』の、白帝の記事がある卷三十四に、「行者謠曰、朝發黃牛、暮宿黃牛。三朝三暮、黃牛如故（行者謠いて曰く、朝に黃牛を發し、暮に黃牛に宿る。三朝三暮、黃牛故の如し）」

という黃牛山についての歌が載っており、先に挙げた李白の五言詩「上三峽」の次のような後半は、この旅人の歌に據っている。

「三朝上黃牛、三暮行太遲。三朝又三暮、不覺鬢成絲（三朝黃牛に上り、三暮行くこと太だ遲し。三朝又三暮、覺えず鬢絲と成る）」

李白は實際に黃牛峽をさかのぼったことがあろう。この作品の制作時期を確定することは難しいが、これは實際にさかのぼった時の作かもしれない。そうであつても、その時には黃牛山を通り抜けるのに、二日で行けたかもしれないし、四日以上かかったかもしれない。また雨や雲で黃牛山が良く見えなかったかもしれない。そして、たとえそうだとにしても、この詩では「三朝又三暮」というのである。それは、典故を重んずるからである。「三朝三暮」と述べれば、詩の中で、李白の體驗の裏に、無數の旅人の體驗が重なることだろう。

したがって『水經注』の記事による「早發白帝城」の場合も、自分の體驗に合わせて語を入れ替えてしまふ、ということとはしない。それは、典故を尊重するからである。たとえば、自分が三峽をくだつたとき、船が巫山から漢陽に向かったのだとしても、『水經注』の記事にある「白帝」を「巫山」に変え、「江陵」を「漢陽」に変えて「早發巫山」という詩にして『水經注』の記事をもじって詩にしよう、という發想はない。それでは、典故を尊重していないことになるからである。もしそういう實體驗を語る詩を作るなら、『水經注』の記事による詩とはまた別の、自分の作品を作ればよい。

獨創性、という點に關しては、李白は他の詩人に抜きんでいて、追隨を許さないう。それでも、あるいは、それだからこそ、『水經注』の記事を詩に作ろう、というときに、あたかも自分の體驗を歌っているかのようにして獨創性を装おう、という意識は働かないので

ある。

では次に、本詩が『水經注』を越えて、いかにして作品となつたのか、という点について考える。

七、構成—まとまりの良さ

この作品の特徴の一つとして、松浦友久氏は「作品全體のまとまりのよさ」をあげる。⁽²⁹⁾

この作品の構成について考えてみよう。

起句で、旅の出發點を示す。承句では、その目的地を述べて起句を承ける。轉句は、突然猿の鳴き聲となる。結句では、船の速さによって轉句を収める。あるいは次のようにも分析できる。前半は、白帝から江陵までの航程を説明する。後半は、船が一氣に駆け抜ける様を描寫する。

松浦氏の言う「作品全體のまとまりのよさ」とは、こうしたまとまりの良い構成をいうのではないだろうか。

そして、この作品が構成上のまとまりのよさを示す理由の一つとして、『水經注』の記事を整理し、凝縮して書かれていることがあげられるのではないか。リズムはよいが繰り返しが多く説明的な『水經注』の記事を構成しなおして、四句に凝縮し、絶句として完成させたのである。

ここで、やはりよく知られている、李白の次の作品を見てみよう。

望廬山瀑布二首之二⁽³⁰⁾ 廬山の瀑布を望む二首の二 李白

日照香爐生紫煙 日は香爐を照らして紫煙を生ず

遙看瀑布挂長川 遙かに看る瀑布の長川を挂くるを

飛流直下三千尺 飛流直下三千尺

李白「早發白帝城」の發想

疑是銀河落九天 疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか

起句は、香爐峰という立地を述べ、承句は視點の先の瀑布をいう。

轉句で直下三千尺の飛流を描き、結句で銀河になぞらえて轉句を収める。あるいは、前半は廬山瀑布の景を説明し、後半に、瀑布が一氣に落ちるさまを描寫する、と分析することもできる。この構成は、「早發白帝城」と似て、まとまりのよいものではないか。

ところで、この詩は二首の連作の第二首であり、連作の二首は同時期に書かれたと考えられる。第一首は次のようである。

望廬山瀑布二首之一⁽³¹⁾ 廬山の瀑布を望む二首の一 李白

西登香爐峰、南見瀑布水。挂流三百丈、噴壑數十里。

歛如飛電來、隱若白虹起。初驚河漢落、半灑雲天裏。

仰觀勢轉雄、壯哉造化功。海風吹不斷、江月照還空。

空中亂淩射、左右洗青壁。飛珠散輕霞、流沫沸穹石。

而我遊名山、對之心益閑。無論漱瓊液、且得洗塵顏。

且諧宿所好、永願辭人間。(傍線筆者)

第一首と第二首を比較してみよう。

まず第一首第二首ともに、第一句に、香爐峰という立地を述べ、第二句に、視點の先の瀑布をいう。この部分の構成は、同じである。

第一首第三句「挂流(流れを挂く)」、第二首第二句「挂長川(長川を挂く)」、語がほぼ似ている。

第一首第五、六句「歛如飛電來、隱若白虹起(歛として飛電の來るが如し、隱として白虹の起るが若し)」という説明が、第二首第三句に「飛流直下」と簡潔に表現されている。

第一首第三句「三百丈」、第二首第三句「三千尺」、語意は同じ。

第一首第五、六句「初驚河漢落、半灑雲天裏(初めは驚く河漢落ち

て、半ば雲天の裏より灑ぐかと」が、第二首第四句「疑是銀河落九天」となる。發想は同じである。

第一首は、このあと「壯哉造化功（壯なるかな造化の功）」と大自然の偉大さに及び、さらに瀑布を描寫した後、「永願辭人間（永く願う人間を辭するを）」と、廬山への期望で終わる。

すなわち、第二首は、第一首の最初の八句をさらに凝縮したような形になっている。

次に「望廬山瀑布二首」で、廬山の瀑布の長さを三百丈、三千尺としてゐることを考えてみる。三千尺といえば、七百メートルほどか。廬山は千五百メートル級の山である。そのような落差の瀧が實際に廬山にあるものか。これは李白のおおげさな表現ではないか。

しかし、『水經注』卷三十九「廬江水」には「廬山記」を引いて、「白水在黃龍、南即瀑布也。水出山腹、挂流三四百丈（白水黃龍に在り、南は即ち瀑布なり。水山腹より出で、流れを挂く三四百丈）」^{②③}という。李白が見た瀧と同じ瀧だったかはわからない。だが廬山に三四百丈の瀑布があったということはすでに記されていることである。「三百丈」は李白の創作ではなく、根據のある數字、むしろ控えめな數字であつた。

「望廬山瀑布」第二首には、たしかに天才李白の閃きが隨所に見られる。しかし、それでも第一首を見れば、このとき李白には、觀察による様々な描寫、感動による様々な表現、大自然への感慨、廬山への期望などがあつたことがわかる。「望廬山瀑布」詩の發想についてはさらなる検討が必要であるが、ここで注意したいのは、第二首の絶句が、瀑布を見たときに天啓としてたちまち閃いてできあがつたのでは無かるう、ということである。「早發白帝城」と成り立ちは異なるかもしれないが、それでも、「望廬山瀑布」第一首や『水經注』の記

事から考えれば、想像、觀察、感動、期望、また目にしたことがある驚くような數字など、大きく廣がつた詩想が凝縮した結果、第二首が得られたのであらう。

「早發白帝城」に戻ると、この作品は基本的には、『水經注』の記事を下敷きにし、そこに繰り廣げられた説明を構成しなおし、想像を廣げ、さらに凝縮した結果生まれたと考える。

それに加えて、「早發白帝城」に有つて『水經注』には無い語、すなわち「彩雲」「千里」「還」「輕舟」「萬重」などの語が由つて来る淵源や、そこに込められた感慨なども本詩の中に凝縮されているに違いない。これらの語については、本論では論及しきれなかつた。さらなる研究が必要である。

次には、本詩から感じられる體感について述べたい。多くの注釋者が、この詩は實際に李白が船に乗つてゐるときに作つた作品だとするが、おそらくはその根據となつてゐる、本詩から感じられる體感である。^{②③}

八、體感について

體感、すなわち、實體験に基づいて體に感ずる感覺、あるいは、實體験に基づくかのような感覺について述べよう。

この作品から感じられる感覺について、二つのことが述べられる。

ひとつは、スピード感である。もうひとつは、萬重の山を通り抜けた安堵と高揚感、そしてそこに廣がる景色である。

作品のスピード感は、特に後半の二句から感じられる。後半の二句についてはいろいろな解釋が行われており、「兩岸の崖上、猿が一聲啼いて、未だ絶えざる間に、わが舟は、すでに萬重の山を過ぎてしま

った³⁶⁾というふうに譯されることもある。白帝から江陵までを一日で行くとしても、萬重の山を抜けるには相當の時間がかかるだろう。その間中、猿の一聲が終わらなかつた、ということは現實的ではない。李白は、非現實的な、あるいは根據のない詩句を作らない。したがって、この譯には賛成できない。

しかし、第三句末から第四句はじめの「啼不盡」「已過」とたたみかける動詞の働きに、こうした譯さえ引き出す要素がある。讀者にスピードを體感させる語である。

「啼不盡」、「猿は啼き盡くさず、まだ終わっていない」。「已過」、「船はすでに通り過ぎた、もう終わってしまった」。讀者の腦裏に浮かぶ光景を想像すると、次のようである。耳には、猿の鳴き聲がずっとまだ聞こえている。それなのに、船はもう通り終わってしまった。ここで慣性の法則が働くとすれば、「まだ動いているうちに、突然終わっていた」という、つんのめるような気分がある。快速電車に乗っていて、急に電車が速度を落とした時のような感覚である。

これは、第二句にある「千里江陵一日還」という、『水經注』由來の説明からだけでは感じられないスピード感で、非常に巧みな措辭といえる。李白は、實體驗からか、あるいは想像の中にか、まだまだ續くと思つた萬重の山がもう見えなくなつていた、という、つんのめるような氣分を味つたのであろう。そしてその感覚を作品に表現し得たのである。

もうひとつの感覚について述べれば、第四句の「已過」という語に感じられる、險しい三峽を無事に通り返けたという安堵と、その先に廣がっているであろう見晴るかす平野の廣々とした感覚である。

長江の場合、宜昌を抜けて江陵あたりまでくると、見事な平野が廣

がる。實際に體驗すると、これは非常に印象的である。海に至るまで、その下流には、兩岸に迫つて天をおおうような高峻な山々は、もはやない。荒ぶる峽谷を「すでに通り抜けた」「ようやく通り抜けた」。ここからは、廣野の中を滔滔と流れる大河に身を任せて行けばよい。三峽を通つて、長江を下つたことがある者なら、なおのこといだけ安堵と高揚感であらう。

この章では、この作品から讀者がスピード感や高揚感といった體に感じる感覚を得るとしたら、それはどのような理由からなのか、ということについて述べてきた。それは、李白自身が快速船に乗っているときに天啓のように落ちてきた閃きによつてできあがつたのではない。そこには、詩人李白による巧みな構成と措辭とがあつたのである。

九、おわりに

これまですでに、この作品に關連して『水經注』の記事が擧げられてきた。しかし、これまで、本詩に關する議論は『水經注』の記事を論ずることなく、李白が白帝から江陵まで一日で下つたことは自明のこととして語られることが多かつた。

本論では、果たして李白が體驗のみからこの作品を作つたのか、という疑問を手掛かりに、様々な角度から作品の發想について考察を加えた。

本詩は、白帝から江陵に下る輕舟の中で、天啓のように閃いてたちまちのうちに作られた作品ではない。詩の素材はすべて、『水經注』の記事の中にある。第一句の出發、第二句の航程、第三句の猿聲、第四句の重なる山々は、すべて『水經注』の記事の中にあるものであつた。白帝から江陵までの千里もの航程がわずか一日だという本詩の主

題も、『水經注』の中にある。

李白が少なくとも二回は三峽を下った経験を持つということは知られている。しかし、『水經注』の記事から考えても、李白の傳記を見ても、李白が實際に白帝から江陵に下る輕舟に乗った可能性は低い。この詩は、基本的には『水經注』の記事を構成しなおし凝縮して作られた作品であつたと考える。

その際、李白は、典故に嚴密に據る、という立場を取つた。『水經注』の記事を詩に作ろう、というときに、あたかも自分の體驗を歌っているかのようにして獨創性を装おうとはしなかつた。本詩が「朝辭白帝」と、『水經注』の「朝發白帝」という句をなぞっているかのやうに始まるのはそのためである。

本詩が『水經注』の記事を越えて名作となつた要素は、その巧みな構成力と見事な措辭にある。前半に説明を置いて後半の描寫に持ち込む構成、後半の「啼不盡」「已過」という動詞の使い方、それらによつて、自らが三峽を下つたような感覺を生じさせているのである。三峽の山あいを行くスピード感、通り抜けたときの高揚感を表現し、そして、その感動を讀者に共有させることに成功した。そのために、本詩は名作という高い評價を得るに至つたと考える。

李白「早發白帝城」がどのように作られたのか、本論がその發想を解明する手掛かりとなれば幸いである。

注

(1) 『四部叢刊』三編子部『太平御覽』（靜嘉堂宋刊本）による。

(2) 靜嘉堂本『李太白文集』卷二十（平岡武夫『唐代研究のしおり第九 李白の作品 資料』京都大學人文科學研究所 一九五八年）による。題

下注に「一作白帝下江陵」。末句注に「一作須臾過却萬重山」とある。

元・楊齊賢集注 元・蕭士贇補注『分類補註李太白詩』卷二十二（景蕭山朱氏藏明郭雲鵬刊本）（『四部叢刊』初編所收）、楊齊賢集註 蕭士贇補注『分類補註李太白詩集』卷二十二（霏玉齋校刻）、清・王琦輯註『李太白文集』卷二十二（寶笈樓 乾隆二十四年序刊本）、『李太白文集』卷二十（繆曰芑重刊宋本）も同じ。

當塗本『李翰林集』卷十九（黃山書社出版（二〇〇四年）による玉海堂・光緒三十四年刊『景宋咸淳本李翰林集』）は、題名を「白帝下江陵」とし、末句を「須臾過却萬重山」とする。

明・高棅『唐詩品彙』卷四十七（『四庫全書』）、明・李攀龍『古今詩刪』卷二十一（『四庫全書』）、清・曾國藩輯『十八家詩鈔』卷二十六（『四部備要』）、清・孫洙（衡塘退士）輯『唐詩三百首注疏』卷六（聚錦堂刊道光十七年序）、明・蔣一葵箋釋『唐詩選』卷七は、第三句末「盡」を「住」とする。清・王翼雲註『古唐詩合解箋註』卷五（有益堂藏版 光緒十三年）は、題を「下江陵」とし、第三句末「盡」を「住」とする。

題名を「白帝下江陵」とした場合は、「早發白帝城」よりも説明的に述べることになる。作品の内容に則している。

第三句について、管見する所、李白の全集は「啼不盡」とし、唐詩の選集は「啼不住」とする傾向があるようだ。「盡」「住」はニュアンスの違いはあるが、いずれも猿が鳴きやまないことを言っており、作品全體の意味に大きな違いを與えてはいないと考ええる。本論では底本の「啼不盡」によつて論を進める。

第四句を「須臾過却萬重山（あつという間に多くの重なる山を過ぎ去つてしまつた）」とするテキストは少ないが、宋本に注記されているところから、この句は早くから知られていたと思われる。いずれも猿が鳴

きやまなうちに山々を過ぎていたことを言っており、作品全體の意味に大きな違いを與えてはいないと考える。本論では底本の「輕舟已過萬重山」によって論を進める。

本論で扱う李白の詩は靜嘉堂本『李太白文集』による。

- (3) 明・胡應麟『詩數』外編卷四「正如朝辭白帝、乃太白絕句中之絕出者（正に朝辭白帝の如きは、乃ち太白絶句中の絶出する者なり）」（廣雅書局 光緒二十二年）

清・沈德潛編『唐詩別裁集』卷二十「寫出瞬息千里、若有神助（瞬息千里を寫し出して、神助有るが若し）」（教忠堂重訂本 乾隆二十八年。中華書局（一九七五年）影印二六五頁）

- (4) 松浦友久編『唐詩解釋辭典』（大修館書店 一九八七年）七〇一頁、擔當・稻畑耕一郎。

- (5) 石川忠久著『漢詩の世界』（大修館書店 一九七五年初版 一九八三年十三版）八五頁「兩岸の猿の聲は、腸にしみ入るように響きます。（略）この悲しい猿の聲がこの詩にどういう効果を上げているのかというと、ここにそこはかとなないノスタルジーを感じるのです。つまり、いよいよここから先は中國の中心部へ出てゆく、蜀の山國よさようなら、という気分なのです。ですから、全體にみなぎる力感と、この郷愁から、私はどうも、二五歳の、初めて蜀を出る時の作、と見たいのです。」

- (6) 郭沫若『李白與杜甫』（人民文學出版社 一九七一年）七七頁「他們都忽略了第二句的一個「還」字和第四句的「已過」兩個字。那明明是遇赦東下、過了三峽、回到了荊州時做的。」

- (7) 中島敏夫編『中國の名詩鑑賞五』（明治書院 一九七八年初版 一九八七年第三版）六一頁「たとえば李白に「巴東自り舟行して瞿塘縣を経て巫山の最高峰に登り、晚、還りて、壁に題す」という長篇詩がある。その他、この邊りで詠まれた詩は多い。それらを見てみると、全国各地の名

李白「早發白帝城」の發想

山という名山に登っている李白である、流刑の途中ではなく、この巫山にも登ったことがあったと考える方が穩當ではなからうか。その時期はおそらく李白の安陸時代（二十七歳ころより約十年）である可能性が大きい。したがって、この「早發白帝城」の詩もその巫山登峰の詩と同じとき作られたと考えたい。」

- (8) 李從軍『李白考異錄』（齊魯書社 一九八六年）九一頁「此詩應爲第二次出蜀還家安陸之作。詩中那種歡快跳動的喜悅與李白即將見到離別五載妻子的心情是很相符的。」

- (9) 前野直彬編『唐詩鑑賞辭典』（東京堂出版 一九七〇年初版 一九七二年三版）二八〇頁「この詩の制作期に關しては二説ある。（略）だがこれらの説は要するに、李白の判明した生涯のうちで確實にここを通つたとなし得るのはこの二件であるということを示すにすぎない。「還」の一字でそれがどちらかに決まるといふような性質のものではない。」（擔當・中島敏夫）

- (10) 『四部叢刊』初編『水經注』による。「或王命急宣」の句に「案近刻脫或字」と注する。以後の『水經注』の記事はこの本による。

なお前掲『李太白文集』王琦注は『水經注』の「暮到江陵」を「暮宿江陵」とし「不以疾也」を「不加疾也」とし、中間を略す。

- (11) 前掲『唐詩選』は、注に『水經注』と共に『荊州記』の名を擧げる。本文第二章に引用した『水經注』の記事とほぼ同じ記事が、『太平御覽』卷五十三が引用する劉宋・盛宏之『荊州記』にある。小尾郊一『中國文學に現われた自然と自然觀』（岩波書店 一九六二年初版 一九七二年第三刷）四三〇頁は、この記事に相當する『荊州記』の記事を擧げて、「この記事は、『水經』、『江水注』に、そのまま盛宏之の名を出さずに利用されている。」と述べる。

次に、『太平御覽』によつて『荊州記』の該當する部分を記し、あわ

せて『水經注』の記事との異同を示す。傍線の語が、『水經注』では「」内の語となっている。「」内に(無し)とした語は『水經注』に無く、(増字)とした語は『水經注』にのみある。

「唯」[自]三峽七百里中、兩岸連山、略無闕處。重巖疊嶂、隱天蔽日、自非停午夜分、不見日[曦]月。至於[于]夏水襄陵、沿沂阻絕、或王命急宣、有時云[無]朝發白帝、暮至[到]江陵。其間一[無]千里。雖乘奔御風、不爲[以]疾也。春冬之時、則素湍綠[綠]潭、迴清到[倒]影、絕巘多生櫟[怪]栢[栢]、懸泉瀑布、飛[漱(増字)]其間。清榮峻茂、良多雅趣[趣味]。每[至(増字)]晴初霜旦、林寒澗肅、常有高猿長嘯、屬引淒異、空峽[谷]傳響、哀轉久絕。故漁者歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳。」

この部分に關して、『水經注』の記事も『荊州記』の記事も、内容に大きな隔たりはない。また、兩者とも、唐代の本に引用されており、李白の當時、通行していたと推測される。

なお、北周・庾信『庾子山集』(『四部叢刊』)卷十三「周大將軍司馬裔碑」及び同卷十四「周柱國大將軍紇于弘神道碑」に「朝發白帝、暮宿江陵」の句が見られる。當時この二句が慣用的に用いられていたことも考えられる。

李白がどの本を見たのか、決め手はない。本論では、王琦注他多くの注が引く『水經注』の記事によつて考察を進めることとする。

- (12) 久保天隨譯註『李白全詩集下卷』(『續國譯漢文大成』文學部 國民文庫刊行會自一九二八年至一九三二年) 三三〇頁、瞿蛻園等校注『李白集校注』(里仁書局一九八一年) 一二八一頁、詹鏞主編『李白全集校注彙釋集評』卷二十(百花文藝出版社 一九九六年) 三三三頁、安旗主編『李白全集編年注釋』(巴蜀書社二〇〇〇年) 一二二頁、郁賢皓校注『李太白全集校注』卷十九(鳳凰出版社二〇一五年) 二七三六頁。

稻畑耕一郎は前掲『唐詩解釋辭典』で語釋に『水經注』の記事を引用し、七〇一頁に「李白のこの詩が、作者の實體驗に即して作られたものであることは疑いないが、同時にその表現においては『水經注』、あるいは『荊州記』を典據としたと思われる點が多い。」と述べる。

- (13) 李白詩の「彩雲」に、王琦は「巫山の雲」という注を付ける。
『李太白集注』卷二十一「早發白帝城」注「琦按白帝城在夔州奉節縣、與巫山相近。所謂彩雲正指巫山之雲也(琦按するに白帝城夔州奉節縣に在り、巫山と相近し。所謂彩雲正に巫山の雲を指す)。」

巫山の朝雲傳説は『水經注』卷三十四の白帝の記事のすぐ前にある。「彩雲」はこの傳説と直接の關わりはないかもしれないが、『水經注』を讀んでいる時にイメージとして残つた可能性はある。

- (14) 稻畑耕一郎は、前掲『唐詩解釋辭典』七〇一頁で、語釋に『水經注』のこの一節を引用したうえで、「啼不盡」の意味を判斷する上でも、參考とすべきではないだろうか。」と述べる。

- (15) 『文選』(中華書局一九九七年 胡刻本影印) による。

- (16) 『分門集註杜工部詩』卷二十五(『四部叢刊』)

- (17) 『李太白文集』卷十二

- (18) 『李太白文集』卷二十

- (19) 『李太白文集』卷二「我行巫山渚、尋古登陽臺。天空綵雲滅、地遠清風來。神女去已久、襄王安在哉。荒淫竟淪沒、樵牧徒悲哀(我巫山の渚を行き、古を尋ねて陽臺に登る。天空しく綵雲滅し、地遠く清風來る。神女去りて已に久し、襄王安くに在る哉。荒淫竟に淪沒し、樵牧徒らに悲哀す)。」

- (20) 『李太白文集』卷十二

- (21) 『李太白文集』卷十

- (22) 『李太白文集』卷十八

(23) 管見する所「白帝」という語が見られる作品は次の六首である。

「竄夜郎於烏江留別宗十六璟」(『李太白文集』卷十三)、「留別龔處士」(『李太白文集』卷十三)、「爲宋中丞請都金陵表」(『李太白文集』卷二十六)、「荊州歌」(『李太白文集』卷四)、「巫山枕障」(『李太白文集』卷二十三)、「江上寄巴東故人」(『李太白文集』卷十二)

本論で取り上げた三首以外の「荊州歌」「巫山枕障」「江上寄巴東故人」の中で、白帝は、三峽を説明するための地名のひとつとして用いられており、本論の論旨とは関係がない。本論で取り上げて論じることとは無い。

(24) 『孫子』「九地」「率然者常山之蛇也(略)撃其中則首尾俱至(率然者常山の蛇なり(略)其中を撃てば則ち首尾俱に至る。)」による。

(25) 『李太白文集』卷七

(26) 郭沫若、前掲書五九頁「李白本有遷都金陵的主張、故加意寫出金陵的復活。」

(27) 『李太白文集』卷二十一

(28) 「李白の詩中の數字のほとんどは、傳統的な詩語の用法を引き繼いでいた。李白以前の詩文に全くない、破天荒な詩語の用法は、李白の好む所ではない。」(市川桃子「李白「白髮三千丈」の意味と數字の用法」『石川忠久先生星壽記念論文集 菊を採る東籬の下』(汲古書院二〇二一年)一九二頁)

(29) 松浦友久『李白―詩と心象―』(現代教養文庫 社會思想社 一九七〇年)三五頁「作品全體のまとまりのよさ」

(30) 『李太白文集』卷十九。結句「九」の下に「一作半」、句末に「一本題云望廬山香爐峰瀑布、曰、廬山上與星斗連、日照香爐生紫煙、下兩句同」と注する。

(31) 『李太白文集』卷十九。題下に「尋陽」と注する。「見」の下に「一作

望」、「丈」の下に「一作三千匹」、「電」の下に「一作練」、「河漢」の下に「一作銀河」、「裏」の下に「一作半渴金潭裏」、「江」の下に「一作山」、「人間」の下に「一作集譜宿所好、永不歸人間」と注する。

(32) 前掲四部叢刊本による。前掲王琦注本の題下注にも記される。

(33) 『水經注』卷三十九「廬江水」には「上望之連天、若曳飛練于霄中矣(上に之を望めば天に連なり、飛練を霄中に曳くが若きなり。)」という描寫がある。「望廬山瀑布」の發想と『水經注』の關りについては、別の機會に考えてみたい。

(34) 前掲『唐詩解釋辭典』七〇三頁に、「作詩の地點。A 江陵に下る舟の中。B 江陵に着いた後」としてまとめられている。稻畑耕一郎はこれに關して「輕快なテンポの詩であり、急流を下る舟の中で作られたものと考えた方が、一層の臨場感が傳わるのではないだろうか。むろん、その場合でも、江陵についてから、完成された可能性がないわけではないが、詩想は明らかに舟の中のものであり、やはり舟中での作として鑑賞したほうがよいであろう。」と記す。

(35) これらの説については、前掲書『唐詩解釋辭典』七〇〇頁にまとめられている。

(36) 久保天隨、前掲書三二二頁。「餘論」に「猿の一聲啼き止まぬ間に、萬重の山を過ぎたといふのは、迅速の極で、その詩筆は、風雨を驚かして、鬼神を泣かしめる。」とある。